将軍学　其の16

1　人生とは、変化し、成長し、限界を広げることである。

2　人生において困難な局面に出くわした時、あきらめという心の弱さに負けるのか、それとも乗り越えていくのか。まずは、自身の心との闘いである。

3　人生経験の豊かさは、言葉ではなく行動によってこそ測られよう。「人生の年輪を重ねるごとに心がいよいよ若々しさを増していく」。

4　常に「さあ、これからだ」と力強く前進する。これが真の健康である。本当の長寿である。

5　青年は、社会の活力の源泉である。いかに時代が変化しようとも、人材育成こそ未来の命運を決する焦点である。

6　未来を築くということは、人間をつくること。言葉は人格、人間性の発露である。

7 人生を大成させるかどうかは「志」の有無によって決定づけられてしまう。

8 指導者と権力者の違いは、どこにあるのか、指導者は民衆を敬い、青年のために手を打ち、青年を育成する。

9 夢を追いかける人は美しい。人のために生きる人はもっと美しい。

10 人材はほめて伸ばせ。長所を見つけよう。真心の一言で成長の勢いは加速する。

11 励ましは組織の血流である。その脈動があってこそ、皆が生き生きと活動に励むことができる。励ましを忘れれば組織は形骸化する。

12 そうなればヤル気も歓喜も確信も損なわれていく。絶えざる激励こそが前進の活力となるのだ。

13 人間として、とりわけリーダーとして大事なことは常に「感謝」と「賞讃」の心をもち、それを素直に口に出せるかどうかである。どんなに心で思っていても言葉や振る舞い

として表現できなければ心は通じない。

14 今、時代は確かな「幸福感」を見失っている。真実の幸福とは何か。「人生の幸福は生きることの中にはなく、正しい活動の中にある」。

15 自分の幸福のためにどんなことをしたとしても、世に長く残るのはただ人の幸福のために尽くしたことだけである。

16 愚かでは勝てない。勝利のために賢明であることだ、賢くなることだ。臆病では勝てない。勝利のために剛毅であることだ、強くなることだ。勇気をもつことだ。

17 読書が大事である。読書は頭脳を磨き、精神を鍛え、心を耕し、忍耐を培う。

18 戦う心を失えば、最後はわびしい人生になってしまう。人生も社会も真剣かどうかで勝ち負けが決まる。遊び半分で勝てるわけがない。

19 人間の違いは持っている信念と行動で決まる。知恵は発展の源泉である。

20 気持ちは見えないが気遣いはわかる。思いは見えないが行動は見える。

21 人生に完成品はない。停滞もない。日々前進か後退か。向上か堕落か。生きることは変化し続けることであり、完成に向かう建設の連続である。

22 この世の、人生の最後の瞬間まで、前進と向上の炎を燃やし続ける一日一日でありたい。その日その日を一年中の最善の日としてを送りたい。

23 勝利の要因は、尊き使命に目覚めた民衆の「決意」であり、「勇気」であり、そして「忍耐」である。

24 人間を人間として、最も人間らしく光り輝かせる力はいったい何か。それは「学びの心」である。学びの人生は強い。行き詰らない。

25 真心からの実践の繰り返しが、正しい人生を進む原動力となり、時代や社会に翻弄されない行動と光る。

26 人生の目的は何か。「勝利者」になること、「幸福」になることだ。では「幸福」とは何か。その中身は「充実」だ。では「充実」とは何か。「苦難」と戦うことだ。苦難がなければ充実はない。何の苦労もない幸福など、どこにもない。

27 リーダー論。「経営者たるもの、決断者であれ」。「多様な人材を適材適所に配置し、平等に評価せよ」。

28 人間の社会は、最後は「心」だ。お金でも、立場でも、名誉でもない。心の世界なのだ。だからこそ、「真心には真心で応える」——そこに徹していきたい。

29 人間は一生涯、自分自身の宝石を掘り出し、磨いていくべきである。学校時代にはあまりぱっとしなかった人が、社会に出てからいろいろな経験をするうちに、今まで掘り当てていなかった自分の鉱脈を発見する例は無数にある。

30 「一生涯、勉強」、「一生涯、学ぶ」——これが、指導者の要件だ。苦しまないと、人格はできない。自分らしくどう努力するか、どう悩むか、どう苦しんでいるかで人格が決まる。磨かれる。ダイヤモンドのように。

31 「精神」という「目に見えない価値」に、どれだけ敏感でありえるか。どれだけ「見えないもの」に眼を凝らし、「聞こえないもの」に耳をそばだてることができるか。そこに人間としての「証」があり、文明を導いていく羅針盤がある。

32 見る側に「眼」が具わっていなければ、どれほど偉大な人物を目の前にしていたとしても、その真価を見分ける事はできまい。偉人の「器」を感じ取れる人とは、本来その偉人と同様の「器」をもった人ではあるまいか。

33 木は根によって、人は友人によって支えられる。「人生は自分の手で、どんな色にも塗りかえられるものだ」。

34 「紙一重」の前進のためにしのぎを削り、そのために「必死の努力を重ねる」。そこに勝利がある。

35 あいさつは、はつらつとした人間性の発露であり、伸びようとする精神の弾みである。外交といっても人間の出会いから始まり、それはあいさつから始まる。心の交流の門戸こそ、あいさつにほかならない。

36 世界に友情を広げるといっても、じつは「一対一の関係」の積み重ねなのだ。小さな一歩一歩を、一人一人を、徹底して大切にしてこそ大きな友情の世界ができるのだ。一対一の関係である。どこまでも。

37 人をうらやんでも、自分がみじめになるだけで進歩はない。そういう感情に負けてはいけない。縛られてはいけない。要するに「人を妬む」より「人に妬まれる」ほうが、ずっといいのでなないか。

38 親子といっても人間関係だ。結局は真心である。策ではない。心でしか、人間の心を動かすことはできないのだ。

39 一つの出会いは、小さな点のようなものかもしれない。しかし、そうした〝点〟と〝点〟が、やがて〝線〟となり〝面〟となって広がっていくのである。

40 「私はこう生きる」——人生は結局、自分で決めるしかない。人に決めてもらうものではない。何でもいい、自分らしく自分自身を革命していく努力を開始したとき、その人の周りも必ず変わる。本人も喜び、周りにも感動が広がることは間違いない。

41 時代の混乱の原因の一つには、「知識」と「知恵」の混同がある。学んだ「知識」を何に使うか。それが「知恵」である。「知恵」のない「知識」をいくら集めても、価値は生まれない。習った「知識」を記憶しているだけでは観念である。

42 それに対して、「知恵」は生活であり、生きる力であり、生き抜く源泉だ。「知恵」こそが、勝利と幸福につながる。「知識」だけでは幸福につながらない。

43 「人間を、人間たらしめる条件」とは一体何か。人間の条件とは、自分自身の最大の価値を発揮していこうとする成長の心である。

44 どんな小さなことでもよい。大事なことは一日一日の生活の中で、眼前の「一丈のほり」を勇敢に飛び越えていくことだ。

45 成長の極意は「いよいよ」の心である。今の状況が良かろうが、前へ前へ。たゆまぬ挑戦また挑戦、不屈の努力また努力こそが「成長」の道なのだ。

46 夢を実現するためにはビジョンが大切だが、やっぱり飛び込む勇気も大切だ。

47 未来予測という作業は、未来はどうなるかではなく、未来をどうするかということに真の意義があると思う。

48 行動が社会を変える。
行動が時代を変える。
そして行動が未来を開く。

49 一人ひとりの人間の生きることへの意志が、人生の全体に反映され、その時代を彩り、やがて歴史へと投影されていく。新しい道はこうして開かれていくと信じている。

50 したがって、未来は現在を生きる一人ひとりの胸中にある。さらに、日々生きゆく日常性のなかにあるとみたい。

51 未来は自己自身の胸中の一念にこそある。約束されたバラ色の未来などない。そのための努力なくしては幻想である。

52 また絶望と暗黒だけの未来もない。それは戦いを放棄した受動的人間のあきらめの産

物だ。

53 勉強すれば自分の視野が広がる。活躍の舞台が大きくなる。今まで見えなかった世界がはっきりと見えてくるようになる。大空から大地を見渡す「翼」を手に入れるようなものだ。

54 心が広がれば、世界が広がる。人生が豊かになる。心が強くなれば、何ものにも負けない。多くの人々をも護っていける。その汝自身の心を鍛え磨いていくことだ。

55 できるかどうかではなく、やるべきかどうかだ。前進また前進。これこそ青年の気概だ。過去にこだわって、これからもダメだと思い込んでしまっては、確実に未来はダメになる。

56 たしかに人間の現在があるのは、過去の自分の上に乗っかっている。しかし、いま考えるべきことは現在の自分をのせている過去ではなく、その自分が未来へ向かって動き出すことである。

57 今までダメだったから、どうせこれからも…とあきらめ、挑戦の心をなくす。反対にこれまでの成功に安住して地道な努力を忘れる。どちらも「過去に負けた姿」といえよう。

58 過去を変えることは誰にもできない。だが、今をどう生きるかによって過去の意味は、いかようにも変わってくる。

59 失敗してもそれをバネにして頑張り、目標を達成すれば、過去の失敗は勝利の一ページと輝く。

60 失敗に学べる人は強い。なぜなら失敗してもそれを教訓として生かせるからだ。それはやがて失敗を恐れない境涯につながっていく。

61 「幸せに感謝する」のは当然だが、実は「感謝できる人は幸せになる」のが人生の真理ではないか。

62 「ありがとう」と言えば相手もうれしくなり、自分も元気になる。きょう一日を「あり

がとう」から始めよう。

63 「心の強さ」には二つある。勇気と寛容だ。勇気とは己心の衝動を抑えて、方向を転ずる能力だ。

64 寛容とは、人々を助け、友情の絆によって結びつけようとする努力。

65 自ら変わる気のない者に限って、もっぱら他人を変えようとする。組織をどう動かすかではない。自分を革命することだ。自分が生まれ変わっていくことだ。

66 挑戦すべきは、人に対してではない。自分自身にだ。自分の弱さにだ。そして自分に勝っていくのだ。焦らずに自分を磨き、自分自身の使命に生き抜いていくことだ。

67 リーダーの真剣な行動に仲間は奮い立つ。誠実一路の人が最後は必ず勝つ。誠実であれ、真剣であれ、真心で光れ。

68 声は力なり。さわやかな声、思いやりのある声、勇気凛々とした声ではつらつと行こう。

69 朝に勝つことは、人生に勝つことだ。信頼も実証もそこから生まれる。一日を快活に出発しよう。一歩一歩前進、一日一日勝利、未来を見つめて進め。勝つための人生だ。

70 危機管理とは、感覚の麻痺であり、まさに油断である。まず自身のその感覚を打ち破るところから始まるといえよう。

71 「思いやり」とは「思いを遣る」、すなわち思いを相手に差し向けることだ。

72 人材を育てる人が真の人材である。最前線へ走れ。「一人」を励ませ。そこから勝利の波が。リーダーが先頭に。これが合言葉だ。

73 求道の人は強い。前進し続ける人はいつも若々しい。相手の心の声に耳を傾けてこそ信頼の扉は開く。「聴く力」こそ対話の急所だ。

74 「一人は全体のために、全体は一人のために」——この自覚と思いやりは、殺伐とした人間関係が嘆かれ、危機打開へ展望のもてない今こそ求められよう。

75 人間は、自分が経験したときに、先人の行動がいかなるものであったかよく理解できるものである。その敬愛の思いこそ、いわば先人へ捧げる勲章なのである。

76 人間というのは、必ず何かの縁によって生きているものだ。良い人と付き合えば良い心に染まり、悪い人と付き合えば悪い心に染まる。どんな善人でも悪い世界に入れば、二、三割は悪人になってしまうであろう。だからこそ、良き人を求めていきたい。

77 夫婦にとって何より大切なのは、〝感謝する心〟と〝共通の目線〟ではないかと思う。もとは他人同士のふたりである。一緒に生き抜いていくと決めた、いわば共同体としての〝責任〟と〝信頼〟と〝励まし合い〟が、自然のうちに心と心を結ぶ、美しくも強い絆となっていくのではないだろうか。

78 真実の夫婦のあり方は単純ではない。環境によって決まるものでもなければ、状況によって左右されるものでもない。富や平穏が気持ちを引き離す場合もある。客観的には苦しみの坂のように見えても、それが一番、ふたりを近づけた幸福の季節という場合もある。

79 何かあったら揺らぐという相対的な信頼ではなく、絶対性の絆というか、真実の愛情は、風波があるたびにふたりの奥深くに育っていくものである。

80 教育は、生命の尊厳になる宝である。
教育は、幸福の平等なる光である。
教育は、未来の自在なる力である。
ゆえに教育に捧げた労苦は、人間の究極の栄光である。

81 教育に大いなる目的を決して見失ってはならない。それは人間の成長以外にない。「人間のため」、「人間の成長」という原点から出発することを。

82 政治も経済も科学も宗教も、現代のあらゆる営為を本源的に蘇らせていく鍵が教育である。

83 自分を信頼して恐れを乗り越えていく。ありのままの自分で飾らず、前へ前へと勇敢に進んでいく。それは、見えないところでの不断の努力があってできることである。

84 「知識」は「知恵」を生むものである。いわば「知識」はポンプ、「知恵」はポンプによって得られる水だ。水を使えなかったら、ポンプに意味はない。また「知識」という、ポンプなくしては、「知恵」という水も十分には得られない。

85 だれにでも皆、必ず使命がある。君の力を必要とする人が、必ずどこかにいる。自分にしかできないこと、自分が本当にやりたいと思うことが、きっとある。

86 それを見つけるためには、まず目の前の「現実」から逃げないことだ。逃げずに頑張る「くせ」をつけることだ。そうやって、もがきながら、自分らしく1ミリでも2ミリでもいいから「前」へ進むことだ。

87 人間は「生きる意味」を求める動物である。それさえあれば、どんな苦しいことでも頑張れる。それがなかったら、他のすべてがあったとしても虚しい。心はゆっくり死んでいく。

88 苦労さえも美しさに育てるような生き方とは何か。それは世界でたった一つしかない自分の人生を愛おしむこと。一日一日をていねいに生き、一生を自分らしく仕上げて

いく。

89 そういう〝自分を大切にし、自分に忠実に生きる〟ことではないか。その人にはグチがないし、いつまでも若々しい〝心の張り〟がある。目立たなくても、皆からちやほやされなくても、黙々と自分の夢に向かって努力している人――その人こそ、本当にカッコいい人だ。

90 自分らしく全力疾走することだ。全力で走ってみなければ、自分にどれだけ力があるかわからない。走ってみもしないで「どうせ自分なんか」と決めつけるのは傲慢だ。生命に対して、自分に対して傲慢だ。卑怯とも言える。

91 人間の可能性というのは不思議なもので、自分は頭が悪いのだと決めつけると、本当に働かなくなってしまう。「自分の頭脳は、ほとんど使っていないのだ。眠っているのだ。だから、努力すればいくらだって自分はできるのだ」と確信することだ。事実、そうなのだから。

92 人間は、生きているかぎり必ず悩みがあり、課題があるものだ。その悩みや課題を〝ど

うやって〝克服するか。ただ一つ、自らの「挑戦」によってのみ、それは可能となる。むしろ喜びや楽しみにさえ変えていける。つまるところ、自分自身に勝利する中にしか満足もないのである。

93 この世に生まれてきた以上、絶対に自分にしかできない自分の使命がある。そうでなければ、生まれてこない。宇宙は決して無駄なことはしない。何か意味がある。人それぞれの個性があり、使命があり、意味がある。

94 悪なくして善はなく、善なくして悪なし——両者は、相対的であるとともに相補的な実在である。決定的に重要なことは、善も悪も互いに（善なら悪を、悪なら善を）「他者」として、その関係性の上に「自己」を成り立たせるということである。ゆえに、悪も対応のいかんによっては善に転じ得るのだという点では、可変的実在なのである。

95 自分自身を支配できた人こそが、本当に自由なのだ。賢者は心の自由人、愚者は心の奴隷なのだ。

96 個性は「人間として、人間らしい生き方をする」根本である。お金は使ってしまえば

97 無くなってしまう。物はいつか壊れるし、「自分自身」を豊かにしてはくれない。

個性は、耕せば耕すほど豊かになる。使えば使うほど豊かになる。減りもしなければ、無くなりもしない。そういう何かが、必ず一つは自分の中にある。その「宝」を光らせていく戦いが人生だ。

98 絶対に君には君にしかできない、この世の使命がある。あなたには、あなたでしか咲かせられない人生がある。何を疑ったとしても、このことだけは疑ってはならない。

100 幸福の第一条件は「充実」であろう。「本当に張り合いがある」、「やりがいがある」、「充実がある」——毎日がそう感じられる人は、幸福である。多忙であっても「充実」がある人のほうが、暇でむなしさを感じている人より幸福である。

101 本来、人間は自分に挑戦しているときは伸び続ける。他人と比較しはじめると、成長は止まる場合がある。

102 なにか一つでも、自分が打ち込めるものをもっているならば、たとえばそれが仕事で

あれ、ボランティア活動であれ、なんらかの習い事であれ、それはおのずから自分の心の大地を耕し、育てることになる。具体的な労力の手ごたえのなかでこそ、充実も感じられるのである。

103 幸福の第二の条件は、「深き哲学を持つ」ことである。より具体的には、信ずるに足る宗教をもつことである。それは、人生のバックボーンであり、人生の羅針盤となる。

104 自分はどういう生き方をしようとするのかという、人生の規範となる信念、何が起ころうと動揺することなく、毅然と立ち向かっていける確信となる。自分を律し、精神を高め得る力となる、そうした精神の支柱のある人生は幸福である。

105 経済的な「豊かさ・貧しさ」など、人間の本当の価値から見れば、ちっぽけなことだ。少々お金があるからといって、それを鼻にかけて人を見下す人間がいれば、その心は貧困であり、敗北だ。

106 幸福は、人が与えてくれるのものではない。自分が自分で幸福になっていくのだ。そのためには、自分を大きく育てるしかない。「自分を十分に生かす」しかない。自分の

107

成長や可能性を犠牲にして、恋愛をしても幸福はない。「自分を十分に生かす」ことによって得られる幸福こそ本物である。

悲しみを糧にして、もっと大きな自分になればいい。もっと素敵な自分になればいい。苦しんだあなただからこそ、そうなれるのだ。顔を上げるのだ。自分は一生懸命生きたのだから、本当は「勝利者」なのだ。

社是

みんなで楽しく生きようぜ！